

平成二十九年  
名寄市立大学  
推薦入試・社会人選抜

小論文問題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

\*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、ティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

AとB、二つの文章を読み、後の問に答えなさい。

A

連日、今月東京と大阪で公演する音楽劇の稽古けいこに通っている。「つながる音楽劇」と銘打った珍しい芝居で、タイトルは「麦ふみクーツェ」という、同名の原作（いしいしんじ氏が原作）を舞台化したもので、お客さんには楽器でなくとも何かしら音の出るものを持参していただいて、参加、体験してもらうという珍しいものだ。10日から19日まで、三軒茶屋の世田谷パブリックシアターで上演します、ぜひ珍しいものをご高覧ください。

その稽古場に、前後の仕事の都合があつて車で向かっていると、信号待ちの時、私の車の前に、結構な迫力のいでたちの男性が、これまた厳いついヘルメットをかぶつて、大型の単車にまたがって停止していた。何となく、こういう手合いには近づかないようにしなければと、やや通常より余計に距離をとっていたら、そのライダーが右の方向を見て、何かに気づいて手を振っている。友人か恋人でも見つけたのかと同じ方向を見たら、柵のついた台車に乗せられて、2歳ぐらいと思しき保育園児が6、7人、ゆらゆらと揺られて歩道を進んでいるところで、彼は子供たちに手を振っていたのだ。

見た目やスタイルでキャラクターを判断してすまない思いも湧いたのだが、その光景が微笑ほほえましく、小さな子供たちが楽しそうにしている様は誰が見ても和み癒やされるのだろうなあと短絡的に考えた。

稽古が終わって自宅に戻り、録画してあつたニュースを見ていたら、東京都目黒区で開園予定の保育園が、地元住民の反対やら抵抗やらで、オープンできないでいるという話題が紹介されていた。随分と神経質で狭量な住民がたまたま集まっているのだろなあと見ていたら、私の住む世田谷区でも1年半以上開園が延びている施設もあるという。

保育園の開設に反対する住民からのコメントも放映していた。顔は隠しているが、着ているものや言葉遣いをみると、上品で優しそうな人たちなのだ。曰いわく、「子供が多いと賑にぎやかに」と、およそ反対の理由とは思えない言い回しで語る人や、「納得のいく説明がなかった」などとプロセスを問題視している人がいた。風体で判断してはいけないことを重ねて意識しつついえば、街で子供たちを見れば、「あら可愛いわね、こんにちは。いくつ？」などと声をかけそうな人たちなのだ。

私は素人だが、子供は社会全体の宝であるという認識に素人も玄人もないだろう。子供の声を「騒音」だと思ふような人が増えてしまっているという悲しさ、寂しさを禁じ得ない。もちろん、何を迷惑と感じるかはそのそれぞれで、何に反対しようが、何を煩わしいと思おうが自由だけれど、同じ「デシベル」でも、子供が楽しそうにしている声とノイズでは全くストレスが違うのではないか。

子供は昔の方がもちろんたくさんいたし、外で走り回る遊びをすることも多かっただろうから、五月蠅うるさ

さは今よりも強かっただろう。それでなくても、今社会で問題になっていることの多くは少子化が原因であることが多いのはいうまでもない。こういう狭量な捉え方が、子育てのしにくさに拍車をかけて、さらなる悪循環を生むということを考えておられるのだろうか。

昔と違って、24時間営業の商業施設も爆発的に増えたが、騒音もそれに伴って増えている。保育園は朝からせいぜい夕刻までなので、騒音といっても迷惑の度合いは低いのではないか。それでなくとも、近隣に子供たちが日常的に多く過ごす地域であるなら、安全性や地域の結びつきも強くなるので、間接的に暮らしやすくなるのではないのか。逆に、そういうクレーマーが多い土地柄だとわかると、地域の評価を下げてしまうのではないか。少なくとも、そんな地域に住みたいと、私は思わない。

賛成派の方のコメントも紹介されていた。「子供たちの声は、将来の希望の声ですよ」と。その通りではないか。

(「松尾貴史のちよつと違和感」 毎日新聞 二〇一五年四月五日 日曜版 より)

## B

保育園児の声を「騒音」と思うことに35%の人が同感である――。厚生労働省の調査で、こんな結果が出た。待機児童解消へ都市部を中心に保育所の整備は急務だが、近隣住民の理解を得ることも一定の壁となりそうだ。近く閣議決定される2015年版の厚生労働白書に盛り込まれる。

調査は人口減少に関する意識を探る目的で、3月にインターネットで実施。3千人から回答を得た。

保育園児の声を騒音のように思い、保育所の立地に反対する住民の立場に同感できるか尋ねたところ、「ある程度」が29・7%、「とても」が5・4%で、計35・1%が同感だった。逆に「全く同感できない」は26・4%、「あまりできない」は38・5%で、同感できない人は64・9%だった。

回答者を地域活動への参加機会から見ると、「参加していない」人は38・9%が反対の立場に同感だとする一方、「月1日程度以上参加している」人は26・0%と低くなった。

(朝日新聞 二〇一五年九月二十五日 より) ※朝日新聞社に無断で転載することを禁止する。

問一 文章Aのエッセイの表題からすると、保育園の開設に反対する地元住民のニュースを見て、著者は「ちよつと違和感」を感じている。それは何故か。二百字以内で説明しなさい。

問二 子どもの声は騒音か否かという論争と住民による保育園の開設反対運動について、あなたが考えることを六百字以上八百字以内で述べなさい。